

# Best Education for Returnees

国際人としての資質を最高の日々の中で磨く



チャレンジし続けることで教育を常にリードしてきた洗足学園。今年度より開始する「65分授業」「土曜授業の廃止」は新たな一歩として注目されている。その決断の背景にあるのは、未来を見据えた学際的な知へのまなざしと、『チーム洗足』とも呼べる教員と生徒との深いつながりだ。

なぜ洗足を選んだのか。その理由はさまざまだが、洗足生として過ごしてみている感想は決まっている。「楽しい」とか「いいやがない」「洗足で本当によかった」——アメリカ各地に11年在住していた面美来さん(高1)は、指導の手厚さをまず挙げる。数学で審査を受けると80点以下の人は再試になるのですが、その再試も80点をとらないとずっと続くので、帰国の私としては落ちこぼれにならずにいます。オランダとイギリスに在住していた東田佳子さん(高1)は、「向こうには上下関係がなかったのですが、洗足でいろいろな人に教えてもらいました。新しいことになじめるような環境だったのでよかったです」と語る。20年以上にわたって帰国生を育て続けてきた洗足だからこそその盤石の体制だ。

英語教育においてもその指導力は揺るぎない。ESL(English as a Second Language)の資格を有したネイティブ教員が多数在籍する洗足では、語学力以上に学際的な総合力を養うための指導を行っている。例えばリーディングの授業では1学期間を費やして1冊の本を分析する。「先生によって選ぶ本のカラーも違っていて、中1ではアイルランド紛争の話、中2は『プライドと偏見』や『アンネフランク』など。試験前になると1時間くらい先生と話したりしています」(東田さん)。読み物としても上質な本をセレクトすることで、文学や哲学、社会問題にも知の範疇を広げる。探究型教育を志向する洗足らしい授業だ。

「教員は生徒が自分の意見を言えるためのサポートをします。先生と生徒の仲が悪かったら上手に進まないですからコミュニケーションを大切にしています」

「日本人の教員もネイティブの教員も、私たちの仕事は洗足の生徒を教えることだから一緒にがんばっていききたいですね」(Van Etten教諭)。誰もが力を尽くし、尽くせる喜びを知っている。言うなれば『チーム洗足』。最強の布陣だ。



左から東田佳子さん、高丸ひなたさん、面美来さん



と語るのはネイティブチーフディレクターのMatthew Van Etten教諭。彼自身フランスへの留学経験があり、彼女たち帰国生の心情への配慮も怠らない。「なぜ日本人はこう考えるのですか」と尋ねられることがあるのですが、その気持ちはよくわかります。わたしもそういう違和感や危機感がありましたから。また日本語の勉強を継続しており、その成長過程を示すことで、帰国生・一般生を含めたロールモデルになっている。こうした取り組みは実感としても実績としてもあらわれており、アメリカオレゴン州に在住していた高丸ひなたさん(高1)は、「洗足に入ってからすぐに英検準1級を取ることで、TOEFLは1年間で40点も伸ばすことができました。力がついてきているのがわかります」と語る。



ベルリン模擬国連 面さんは中2のときに参加



卒業式